

インターネット講座：「複式簿記のサイエンスー簿記とは何かを求めて」

## 第7回 利益計算とキャッシュフロー計算(2) ー同型性と相対性ー

〈学習のねらい〉

前回では、損益計算書とキャッシュフロー計算書はその計算目的を異にしている、その簿記構造の基底には相共通する計算構造が存在する、ということを示しました。今回はそうした**計算面**のみならず**記録面**(複式仕訳)においても両者の同型性を明らかにし、そのことで複式仕訳の相対化の議論を行います。

### (4) 複式仕訳の相対化

#### キャッシュフロー計算の複式仕訳ー本体と影

Q：キャッシュフロー計算にも複式仕訳が考えられるのですか？

A：複式仕訳が損益計算にだけ固有のものではないとしたら、どうでしょうか。複式簿記の世界はぐっと広がりますね。しかし、より重要なことはそのことでより深いレベルで複式仕訳が理解できるようになるという点です。

Q：第1回の議論では、貸借仕訳が唯一絶対の仕訳形式であるとのある種の思い込みから解放されましたが、何事も常識・通念にとらわれないことが大切です。

A：その通りです。さて、次に示す仕訳は第2回での損益計算(P/L)に関する仕訳ですが、この取引例を用いてキャッシュフロー計算(C/F)での複式仕訳を考えてみます。

図表7-1 P/L(とB/S)の複式仕訳

|     | (借方)          | (貸方)                      |
|-----|---------------|---------------------------|
| #1  | 商品 70,000     | 買掛金 70,000                |
| #2  | 売掛金 125,000   | 商品 60,000<br>商品販売益 65,000 |
| #3  | 給与 15,000     | 現預金 15,000                |
| #4  | その他費用 10,000  | 現預金 10,000                |
| #5  | 現預金 90,000    | 売掛金 90,000                |
| #6  | 買掛金 50,000    | 現預金 50,000                |
| #7  | 現預金 100,000   | 社債 100,000                |
| #8  | 建物・備品 125,000 | 現預金 125,000               |
| #9  | 減価償却費 10,000  | 減価償却累計額 10,000            |
| #10 | 給与 5,000      | 未払給与 5,000                |
| #11 | その他費用 5,000   | 引当金 5,000                 |

Q：前回でみたように、P/LであれC/Fであれ、個々の取引の内容それ自体に何も変わりはないですね。

A：そう、当然のことですね。さて、上記の仕訳はP/Lに関する複式仕訳ですが、ではC/Fではどうなるか、これがここでの問題です。

Q：考えたこともないので、難しいですね。ヒントでも。

A：1つのヒントは下線の現預金勘定、もう1つは網掛けの損益勘定です。少なくとも

下線はわかるのではないかと思いますが一。

Q:貸方は現預金(キャッシュ)のインフロー(収入)、貸方はアウトフロー(支出)ですよね。

A:そう。複式簿記であるかぎり、キャッシュフローの原因別の説明勘定が必要になりますね。それは、C/Fでの名目勘定とすることができます。つまり、C/Fでの現預金の増減は、P/Lでの名目勘定と同じ役割をもつ収支勘定が担います。

Q:なるほど、わかりました。借方の下線には収入勘定、貸方には支出勘定がでてくるわけですね。

A:そう。例えば、#3の取引(給与15,000/現預金15,000)では貸方の現預金が給与支払いという支出勘定に置き換わることになります。そのことで現預金勘定は仕訳から姿を消します。ここがまたポイントになります。この点、留意しておいてください。

Q:では、もう1つの損益勘定のところはC/Fではどうなりますか?

A:ここは少し説明が必要になります。ヒントを言えば、損益勘定はP/Lの原因別計算の勘定ですので、C/Fのもとではもはや必要なくなりますね。

Q:確かに。では、そこに何が入りますか?

A:そこがポイントです。ここで、先の現預金と収支勘定との関係をもう一度じっくり考えてみてください。収支勘定の設定で現預金が姿を消しましたね。

Q:その現預金はP/Lの仕訳ではでていますね。

A:そう。ここで、逆に、つまりC/Fの複式仕訳からP/Lの仕訳をみれば、P/Lでは収支勘定は不要ですので、むしろその勘定はできませんね。そして、ここがポイントですが、その不要な収支勘定がもともと説明していた現預金勘定がP/Lではでています。

Q:わかりました。逆にC/Fでは損益勘定は不要ですので、その勘定がもともと説明していたもの、つまりC/Fでの現預金に該当するものがでてくる。

A:その通りです。ここで、もともと(名目勘定が)その増減を説明していたものを「本体」の勘定、その変動原因を説明するものを「影」の勘定(名目勘定)としてみます。この「本体と影」のたとえで、P/LとC/Fの複式簿記を説明できますが、わかりますか。

Q:C/Fでは現預金が本体で、影が収支勘定というわけですね。では、P/Lでは、「影」は損益勘定でしょうが、「本体」は何でしょうか?

A:ここで第1回の単式簿記での仕訳を思い出してください。損益取引の相手勘定は損益勘定が設定されないで、そこには何が入りましたか。

Q:思い出しました。単式段階で損益取引の相手勘定を記録するなら、それは資本勘定でしたね。

A:そうです。C/Fの現預金(本体)に該当するのは、P/Lでは資本(あるいはその増殖としての累積ないし留保利益)となります。例えば、先の#3の取引(給与15,000/現預金15,000)では、借方の給与(費用勘定)は資本に置き換えられます。こうして、#3の取引はC/Fでは次のようになります。

#3の取引:給与15,000/現預金15,000→資本15,000/給与支払15,000  
(費用勘定) (支出勘定)

Q:P/Lでの借方の給与(費用勘定)が資本に、また貸方の現預金が給与支払(支出勘定)に置き換わるわけですね。

A: そう。前者は影(給与)が消えて本体(資本)が出る。後者は本体(現預金)が隠れて影(給与支払)が出る。

注意すべきは、影の勘定(名目勘定)の背後には常に本体があるということです。P/Lで言えば、損益勘定の導入によって本体としての資本は仕訳には出てきませんが、その影としての損益勘定のいわば裏側には常にその本体たる資本が存在するという事です。

Q: まさに本体と影ですね。

A: そして、本体が何であれ、C/Fの仕訳でみたように、この関係は同じです。この関係こそ複式簿記の本質面といえます。

Q: 確かに、P/LとC/Fのそれぞれのもとで、本体と影が異なるだけですね。

A: そう。ここで、C/Fの複式仕訳の全体を示しておきます。下線が現預金(本体)のかわりに収支勘定(影)、網掛けがP/Lでの損益勘定(影)にかわって資本(本体)となります。

図表7-2 C/F(とB/S)の複式仕訳

|     | (借方)          | (貸方)                   |
|-----|---------------|------------------------|
| #1  | 商品 70,000     | 買掛金 70,000             |
| #2  | 売掛金 125,000   | 商品 60,000<br>資本 65,000 |
| #3  | 資本 15,000     | 給与支払 15,000            |
| #4  | 資本 10,000     | その他費用支払い 10,000        |
| #5  | 売掛金回収 90,000  | 売掛金 90,000             |
| #6  | 買掛金 50,000    | 買掛金支払 50,000           |
| #7  | 社債発行 100,000  | 社債 100,000             |
| #8  | 建物・備品 125,000 | 建物・備品支払 125,000        |
| #9  | 資本 10,000     | 減価償却累計額 10,000         |
| #10 | 資本 5,000      | 未払給与 5,000             |
| #11 | 資本 5,000      | 引当金 5,000              |

Q: 「本体と影」のたとえで、よく理解できました。ところで、C/Fの複式仕訳のなかに損益勘定は出てこなくても資本は出ていますね。ということは、その資本の増減としての利益計算は行われているのではありませんか?

A: いい質問です。損益勘定がなくても資本の増減は記録されるので、原因別説明はないものの、いわば単式簿記として利益計算はなされているといえますね。この点は、あとの回で2つの複式簿記を統合する試みのなかで議論します。

Q: 2つの「本体と影」が結合されるわけですね。

A: そうということです。楽しみにしてください。それでは、この辺で以上のまとめとして、複式仕訳の要点を示しておきましょう。先の複式仕訳(図表7-2、特に下線と網掛け)で確認してください。

図表7-3 C/Fの複式仕訳の要点(P/L→C/F)

- 1) 現預金勘定(本体)はC/Fの複式仕訳に現れてこない。(本体は隠れる)
- 2) P/Lでの現預金勘定は、キャッシュフロー(収支)取引であるから、C/Fでは新たに設けられた収支勘定(影)に置き換えられる。(本体は隠れ、その影が出る)

3) P/Lにおける損益勘定(影)は、すべてC/Fにおいては資本(本体)に置き換えられる。(影が消えて、本体が出る)

Q:「本体と影」のたとはわかりやすいですね。計算目的が変わることで、本体と影がそれぞれ入れ替わる。

A:その通りです。まとめますと、C/Fの複式簿記の要点は2つあることとなります。1つは、C/Fの本体(現預金)は隠れ、その影(収支勘定)が出る。もう1つは、もとのP/Lでの影(損益勘定)が消えて、その本体(資本)が出る。

以上のことは、さらにC/FからP/Lへの逆方向(変換)についてもまったく同じ理屈になります(図表7-4)。C/Fの仕訳(図表7-2)とP/Lの仕訳(図表7-1)でもって確認してください。

図表7-4 P/Lの複式仕訳の要点(C/F→P/L)

- 1) 資本勘定(本体)はP/Lの複式仕訳に現れてこない。(本体は隠れる)
- 2) C/Fでの資本勘定は、損益取引であるから、P/Lでは損益勘定(影)に置き換えられる。(本体は隠れ、その影が出る)
- 3) C/Fにおける収支勘定(影)は、すべてP/Lにおいては現預金(本体)に置き換えられる。(影が消えて、本体が出る)

Q: C/FでもP/Lでも、まったく同じ理屈なのですね。冒頭で複式仕訳が損益計算だけに固有のものではないと言われましたが、そのことが少し見えてきました。

A:特にその原理的レベルでの議論が大切です。そのことで、複式仕訳が特定の目的にだけのものでないことがわかってきます。ここに計算目的の違いを超えた複式仕訳が見えてきます。これが重要な視点です。

Q:複式仕訳の相対性ですね。

A:そう。P/Lだけの複式仕訳ではこの相対化がなかなかみえてきません。P/Lという特定の計算形態に規定された複式仕訳しか見えないのです。もっと言えば、それは本当に見えているとはいえませんね。

Q:相対化なくして真の姿は見えない。そういうことですね。

A:まさに、その通り。一般的に言えば、ひとつの形態あるいは形式のなかだけでは、思考がその特定の形態や形式に拘束されてしまいます。C/Fという別ものをもってこなければ、本当に見えてこないのです。

さらに言えば、別ものなら何でもいいというわけではなく、同型性をはらんでいるものでないと相対化につながらないといえます。

Q:まさに「同型と相対」。議論のキーワードそのものですね。

A:そう。同型性と相対性は、いわば表裏一体といえます。

#### (5) 2つの複式簿記

ここでは、2つの複式簿記の同型性を示してみます。その際、第2回で説明した新たな仕訳方式(形式その2:2勘定システムの貸借配置方式)を用います(図表7-5)。

図表7-5 P/LとC/Fの複式仕訳の対比(放送大学テキスト76ページ)

## 2つの複式簿記—その同型性

Q: C/Fの複式簿記が考えられますと、少なくともP/Lと2つの複式簿記ができますね。

A: そうです。図表7-5の下に、一般的に2つの複式簿記の同型性を示しています。特に、残高勘定の合計20,000と-10,000が、それぞれP/Lの財産法とC/Fの間接法の計算になっている点に注意してください。

Q: それぞれが単式簿記となっていますが。

A: はい。貸方側(フロー勘定:名目勘定)がなければ、つまり借方側(ストック勘定:実在勘定)だけなら、両者はともに単式簿記となります。こうして、C/Fの間接法が単式簿記の特徴をもっていることが明らかになりますね。複式簿記とともに、単式簿記の同型性です。

Q: 2つの複式簿記だけでなく、2つの単式簿記の同型性ですね。

A: そう。そして、財産法と間接法の上に示されている各仕訳の代数符号は、それぞれの計算(財産法方程式と間接法方程式)の構造符号が付されている点に注意してください。

Q: 貸方側のP/Lの損益勘定、C/Fの収支勘定はどうですか。

A: そこがもう1つのポイントです。すなわち、その構造符号が、さらにそれぞれ右側(貸方)の損益取引とキャッシュフロー取引にそのまま付され(仕訳であるので貸借は同じ数値になる)、そのことでそれぞれ損益勘定の合計が20,000、収支勘定の合計が-10,000になる点(損益法と直接法による計算)に注意してください。

Q: (財産法方程式と間接法方程式)の構造符号が損益法と直接法にも利いている。前回触れられた点ですね。

A: そうです。ちなみに、展開表において交換取引と非キャッシュフロー取引(ヨコ破線下側の取引)のヨコ集計がゼロになるのは、ここでの仕訳ではプラス・マイナスの上下の復記になっていることでわかります。そして、それが構造符号になっていることにも注意してください。

Q: 展開表であれ、代数符号を用いる仕訳であれ、2つの複式簿記の構造がよくみえていますね。

A: そうです。ちなみに、前にも述べましたが、通常の貸借仕訳(貸借簿記)は、ここでの仕訳からみれば、そのマイナスをプラスにするため反対側に移した仕訳方式ということになります。したがって、通常の貸借仕訳の背後には、実は、こうした記録・計算の仕組みがいわば隠されている。展開表や代数符号を用いる仕訳方式は、そのことを見せているという点で興味深いところといえますね<sup>1</sup>。

### (6)「振替」とは一本体と影

Q: では、次の議論についてお願いします。

A: 先に本体と影の話をしましたね。このたとえば、実は、「振替」とはそもそも何かの説明にも役立ちます。

Q: 振替とは損益勘定の差額(損益)を残高勘定の資本にもっていくことですね。

<sup>1</sup> この通常の貸借簿記における(見えてこない)計算構造については、拙著『経営情報と簿記システム(4訂版)』(森山書店、2004年)第3章第3節参照。

A: そうです。その説明に「本体と影」のたとえが有効です。ここで、複式簿記から単式簿記に戻してみましょう。すなわち、P/LでもC/Fでも貸方側のフロー勘定系統が導入・設定される前の段階、つまり借方側のストック勘定だけの段階に戻すわけです。するとどうなるでしょうか。

Q: 第1回の議論でできましたね。

A: そう。すでにみたように、例えばP/Lでの通常仕訳方式による#2の仕訳は、損益勘定が設定されていないので、貸方の商品販売益(影)は資本(本体)となります。

Q: 個々の損益取引ごとに、本体である資本が直接増減する?

A: そうです。したがって、その取引集計残高はそのまま本体である資本の残高となります。

Q: では、損益勘定が設定される複式簿記では。

A: それは、先に説明したように、本体(資本)はいったん姿を消します。そして、その増減記録は損益勘定(フロー勘定)が担うことになります。

Q: しかし、このままでは、その増減結果はあくまで損益勘定にあって本体にはできませんね。

A: そこがポイントです。では、どうすればよいか。もうおわかりでしょう。

Q: はい。振替ですね。

A: そう。期末になって損益勘定の集計結果を本体勘定に移せばよい。この操作が期末における(損益勘定から残高勘定への)「振替」の操作にほかなりません。

Q: ここでも、単式と複式の違いがわかってきました。

A: 単式段階では、損益取引は本体(資本)そのものに直接記入されるから、その損益取引の集計残高はそのまま資本勘定の残高となり、したがって振替の必要性はそもそも生じません。振替は損益勘定の導入による複式段階になってはじめて必要になる操作にほかならないといえるわけです。

Q: よくわかりました。ところで、C/Fでの複式簿記ではどうでしょうか?

A: いい質問です。そこが最大のポイントといえます。結論を先にいえば、C/Fにおいてもまったく同様だということです。

Q: ここにも「同型性」が?

A: そうです。まったく同じです。異なるのは、本体が資本から現預金になること、そしてその増減原因を説明する勘定が損益勘定から収支勘定になることです。

Q: 本体と影が、そっくり入れ替わるわけですね。

A: そうです。つまり、P/Lでは「資本(本体) - 損益勘定(影)」であり、C/Fでは「現預金(本体) - 収支勘定(影)」となります。

そして、重要なことは、振替は損益計算にだけ固有のものではないということです。

Q: やはり、同型と相対。

A: そう。本体と影の関係はまったく同一です。こうして、本体と影の具体的な形態の違いを超えた同型性を抽出することで、振替という操作の相対性が明らかになるわけです。

Q: 形態の相違を超えた「関係の同一性」、なんとなくわかってきたように思います。

A: なお、以上のことを展開表形式で説明した図表7-6を示しておきます。ただし、代数符号は2段階にしています。

展開表の方が、「同型性」と「相対性」をより鮮明に映し出すといえます。宿題として、C/Fでの「振替」を展開表で示してみてください。

図表7-6 「振替」とは(放送大学テキスト82ページ)

(7) 同型と相対—形態自由な見方—

**複式簿記のフレキシビリティ**

Q: このあたりでまとめをお願いします。

A: 今回は、C/Fの複式仕訳を示し、それをP/Lの複式仕訳と対比することによって、そこに貫いている原理はまったく同じであることを明らかにしました。

こうした計算形態の違いを超えて貫いているものを抽出することは、逆にそこから各形態を形成しているものが何であるかをみることによって、新たな形態を見つけることにもつながります<sup>2</sup>。

Q: P/L, C/Fだけでない。

A: そう。まったく同じ原理で、別のフロー計算書(たとえば資金計算書)を導出することも十分可能です。ここに、複式簿記の記録計算システムとしてのフレキシビリティがあるといえます。

Q: 複式簿記のフレキシビリティですか。

A: そうです。記録計算システムとしての複式簿記はけっして特定目的にだけ固有なものではありません。より柔軟で応用の利くものといえます。ただ、先にも述べましたが、こうした複式簿記のフレキシビリティは、特定の計算形態だけの議論からはなかなか見えません。

Q: C/Fの複式簿記を考えるのも、そのためですね。

A: そうです。先にも述べましたが、特定の計算形態だけの議論では、思考がその形態に拘束されてしまうからです。ここに、特定の形態にとらわれない見方(形態自由な見方)の重要性があるといえます。

Q: 「検定簿記」や「受験簿記」だけの学習ではそうした見方はつちかえませんか。

A: まったくです。あとで述べますが、「検定簿記」や「受験簿記」の世界がすべてとってしまうと、実は暗然にそう思っているのですが、住んでいる世界、見ている世界は決して広がりませんね。

**同型と相対**

Q: 特定の形態にとらわれない見方とは、まさに相対化の重要性ですね。

A: そうです。すでに何度も強調していますが、重要なキーワードは「同型と相対」です。そこで最後に、2つの相対について述べておきます。図表7-7をご覧ください。

図表7-7 2つの相対(放送大学テキスト83ページ)

Q: 2つの相対とは?

A: 図表7-7において2つの相対軸があることに注意してください。ひとつは計算目的であり、もうひとつは記録形式(一般的には表現形式)です。

<sup>2</sup> 詳しくは、前掲拙著『経営情報と簿記システム(4訂版)』エピローグ参照。

<sup>3</sup> 拙著『キャッシュフロー簿記会計論(3訂版)』(森山書店、2005年)21-22ページ参照。

Q: 記録形式のT勘定が2つに区分されていますが。

A: 上側が通常の貸借仕訳方式であり、下側が代数符号を使用する新仕訳方式です。そして、上側の網掛領域が現に実践されているところを示しています。これが世界であると思ってしまうと相対化はできませんね。

したがって、現に住んでいる世界も見えてきません。それは図表7-7からして、ほんの部分領域にすぎません。もっと言うと、図それ自体も全体ではありません。

Q: こうしてみると、現に実践されているところ、現に住んでいる世界は小さいですね。

A: そうです。ここで強調したいのは、「学問する」ことの意義です。すなわち、現に住んでいる世界をより高い位置から見ることで、そのことで物事を相対視する力をつけること、ここにあるといえます。要するに、住む世界、見る世界を大きくすることです。

Q: 図の中に2つの矢印がありますが。

A: 先の2つの相対について強調したいのは、ヨコ矢印の方向(①計算目的)が「形態の違いを超えてヨコに貫いているものが何であるか」ということに、またタテ矢印の方向(②記録形式)が「表現の形式を変えることによって、見えてくるものが何であるか」(形式を変えても変わらぬものを見つける)ということに、それぞれかかわるということ<sup>4</sup>。いずれもこれまでの議論で見てきた通りですが、ここに特定の形態や形式にとらわれない形態自由な思考というものの重要性があります。

Q: 「形態自由な思考」ですか。

A: 先にも述べましたが、特定の形態にとらわれない見方です。

Q: 「とらわれない」ですか。

A: そう。その「とらわれない」という点が大切です。逆に言えば、「とらわれている」ことから解き放すこと、これが「学問する」ことの1つの意義といえますね。

余談になりますが、このことは仏教でいう「解脱」にも通じています。ちなみに、私は(選択の)「自由」よりも、この「解脱」あるいは「解放」がより高いレベルにあると考えています。

Q: 確かに、私たちはいつも何かにとらわれていますね。

A: そうです。たとえば常識や通念、あるいは風潮といったものに暗黙にとらわれています。とらわれているということ自体、その自覚もありません。大切なことは、とらわれているには本当の姿(正体)を見ることはできないということです。

Q: 複式簿記も同じということですね。

A: そうです。ともかくも、簿記を特定の人たちだけが学ぶといったクローズなものとしてではなく、簿記・会計の専門外の人たちにも魅力あるものとして見せていくには、新しいより開かれた簿記の新たな可能性が追求されねばならないように思います。

Q: 簿記会計の中でも簿記を軽視する傾向がありますね。

A: そうです。だからこそ、そうした試みが大切になるといえます。端的に言えば、「複式簿記とは何であるか」と同時に、「何でありうるか」という問いかけですね。

Q: 「何であるか」だけでなく、「何でありうるか」も。

A: そうです。「何であるか」の議論が「何でありうるか」につながる、そのような考察が大切なところです。そうした試みは、ずばり「複式簿記のサイエンス」というべき方向を指向したものです。次回以降では、このサイエンスという点についてもう少し詳しく議論してみることにします。

<sup>4</sup> 前者については、特に前掲拙著『経営情報と簿記システム(4訂版)』エピローグ参照。